京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
Inter-Graduate School Program for Sustainable Development and Survivable Societies

News Letter No.13

Contents

プログラムコーディネーターからのメッセージ　ユニット長からのメッセージ　GSS教員からのメッセージ
2016年度GSS予科・予備コース　ホームルーム「Get Together」の開催について　GSS実習系科目報告会の開催
GSS履修生の紹介　国際アドバイザー会議　4月11日の産学協働イノベーション人材育成協議会の説明会（4月ホームルーム）
インターンシップマッチング交流会　学生主催のホームルームレポート　Grant Writing Seminar　編集後記

プログラムコーディネーターからのメッセージ

寶 馨　防災研究所教授

昨年度 2016 年 3 月に京大初の修了生が GSS から出ました。4 年制の博士課程を修了したペルー人のオスカー・エスカランテ君でした。今年度 2016 年 9 月には、L5 の途中（4 年半の履修期間）で、工学研究科の田中智大君と五味良太君が学位を授与されました。修了生諸君の今後の活躍にご期待ください。

ホームルームについて

定期的に開催されるホームルームでは、学生と教員の交流を進めています。今年 5 月に開催されたホームルーム「Get Together」では GSS 予科生、予備生（3 年次編入）、本科生、教員が集まり、グローバル社会で活躍できるリーダーの育成に必須となる活動体験について発表が行われました。また、7 月には、学生主催によるホームルーム「学生による学生のためのカリキュラム相談」が開催され、GSS 学生同士の交流が行われました。これらの詳細は後掲の記事をご参照ください。

インターンシップマッチング交流会について

GSS は、社会で活躍する国際的リーダーの育成を目指しているため、産業界との連携を重視してきました。今年 4 月には産学協働イノベーション人材育成協議会 (http://www.c-engine.org/) によるインターンシップの説明会が開催されました。また、6 月には本学と産学協働イノベーション人材育成協議会との共催により、インターンシップマッチング交流会が開催され、GSS の学生・教職員、企業関係者、教員など、100 名を超える参加がありました。

国際アドバイザー会議に向けて

GSS では、世界各国で活躍している研究者、実践家を国際アドバイザーとして登録し、学生の指導・教育において助言をいただいていますが、年に 1 度これら国際アドバイザーを招いての国際アドバイザー会議 (GIAC) を開催しています。第 6 回国際アドバイザー会議では「行動志向の包括的アプローチ」を一つの柱に、研究者・実践者がいかに社会に貢献できるかを考える場となるべく準備を進めています。また、国際アドバイザー会議では GSS 学生協議会 (GSA) も新たな試みを計画しています。

ユニット長からのメッセージ

塩谷雅人　生存圏研究所教授

今回のニュースレターでは「教員からのメッセージ」の記事として、農学研究科の裏出教授から「生命・食料・環境と GSS プログラム」というタイトルで、安全な食料の確保と農業生産性向上によって引き起こされる環境負荷の問題について紹介いただきましたのでご参照下さい。

前号のニュースレターでもお伝えしましたが、今年度は L1（1 年生）のプログラム履修者（予科生）として 14 名、3 年次からの編入生（予備生）として 2 名が合格しました。GSS プログラムでは、10 月から本科に入る前にグローバル生存学および GSS プログラムについて知り、学生がその中でどういった活動をするのか、その適性はあるかということを各人が見極めるために予科･予備コースを置いています。詳細については「2016 年度予科･予備コースについて」に書かれています。

本プログラムでは実習が重視されており多くの実習系科目が用意されています。また実習で学んだ成果を報告するため GSS 実習系科目報告会が定期的に開催されています。GSS には様々な分野の学生が参加していますので、実習系報告会で異なる分野のお互いの活動を知ることはグローバルに活躍するリーダーの育成にとって有用であると考えています。5 月に開催された第 13 回報告会および 7 月に開催された第 14 回報告会の詳細については「GSS 実習系科目報告会の開催」をご参照ください。

GSS では履修者に研究活動資金を提供していますが、この資金を獲得するためには提案書を提出する必要があります。研究費を獲得するためには魅力的な提案書を作成する能力が不可欠です。そこで GSS では、予科生を対象に提案書の作成方法を解説するセミナーを開催しています。詳細は「Grant Writing Seminar」をご参照ください。

このニュースレターでは毎回 GSS プログラム本科生の皆さんの紹介をおこなっていますが、今回は 10 名の学生さんについて紹介します。各研究科で学ぶ専門知識と GSS プログラムで学ぶ学際的知識によって、社会のリーダーとなるべき人材が着実に育っていることを実感していただけたらと思います。

GSSプログラムのウェブサイトについて

GSS プログラムの活動内容については以下をご参照下さい。
http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/

GSS教員からのメッセージ

裏出令子　農学研究科教授

生命・食料・環境とGSSプログラム

人々が安心して暮らしていくためには、安全な食料の確保が不可欠です。そのため世界的に食料の生産性向上が求められていますが、一方で農業生産が環境に及ぼす負荷は無視できない状況にあります。

農学研究科は、「生命・食料・環境」をキーワードに世代を超えた生命の持続、安全で高品質な食料の確保、環境劣化の抑制と劣化した環境の修復など、人類が直面している困難な課題の解決に取り組んでいます。農学研究科の教育・研究対象は、分子・細胞・個体レベルの生命活動から地球上の生態系、物質循環系さらには地域社会の人間の活動にまで広がっていますが、その多くは GSS プログラムが掲げる「グローバル生存学」と密接な関係にあり、多数の教員が GSS プログラムに参加しています。

GSS プログラムでは４つの必修科目が設定されていますが、農学研究科はその一つの「生存基盤食料学」を担当しています。食料は人類の生存のための必須物資であり、人が食料を得る主な手段が農業です。この講義では人間が農業によってどのように食料を生産してきたか、西暦 2050 年には人口が約 90 ～ 100 億人に到達すると予測されている地球で、今後食料はどのように供給されるのか、されるべきなのかを考えることを目的としています。この科目で扱う内容には、土壌と生命、食料生産と環境負荷、パーム油生産と熱帯林破壊、農薬・化学肥料と生産性、フードビジネス、渇水対策、遺伝子組換え食品など、多様なテーマが含まれています。

農学研究科の特徴の一つとして、附属農場と附属牧場を利用した教育・研究が充実している点があります。「生存基盤食料学」でも、農場実習と牧場実習が用意されています。GSS プログラムには様々な研究科の大学院生が在籍していますが、農学研究科以外の大学院生にとって附属農場や附属牧場で実習に参加する機会は通常はほとんどありません。GSS プログラムには多くの留学生も在籍していますが、農場実習や牧場実習で日本の農業技術を実際に体験することは貴重な経験になると思います。今年４月には附属農場が木津川市の新農場に移転したため、今年度の履修者は新農場の一年目という記念すべき年に農場実習に参加することになりました。６月に実施した農場実習では GSS の学生さんが田植え作業を行いましたが、きっと忘れられない貴重な経験になったことと思います。

グローバルに活躍する人材を育成するうえで、人間が生存するための基盤となる食料について深く理解することは極めて重要です。国内および世界の食料問題について考えることは、グローバル生存学を学ぶ GSS プログラム履修者の皆さんにとって非常に役立つものと思います。GSS プログラムを修了したあと、皆さんが世界各地で世界の食料問題を始めとする様々な社会問題の解決に向けて活躍することを期待しています。

農場実習の風景

牧場実習の風景

2016 年度 GSS 予科・予備コース

フローランス・ラウルナ　GSS特定助教

本年度は、3年次編入2名の学生を含む合計16人が予科・予備コースに合格しました。選抜された学生はいずれも大学院出身者で、専攻はアジア・アフリカ地域研究、農学、経済学、工学、地球環境学、医学などで、出身国は中国、インド、日本、韓国、ネパール、パキスタン、トルコ、ウガンダとなっています。

今年度も、GSS プログラムの基本となるテーマに関するトピックで特別セミナーが開催され、予科生・予備生は主たる活動として５月 24 日から６月９日に順次開催された各セミナーに参加しました。今年度セミナーを開講くださった先生方は、高野先生（経済学）間藤先生（農学部）、速水先生（CSAS）、J.J. Mori 先生（DPRI）、木原先生（医学）そして J. Rappleye 先生（教育学）です。

また、６月 18 日に行われた個人プレゼンテーションでは、様々な専門領域の GSS 担当教員らの前で、それぞれの学生が自身の研究および GSS プログラムとのつながりについて英語でプレゼンテーションを行いました。その後、リーダーシップに関するテーマでグループディスカッションが行われました。

さらに学生は５年間の研究および研究計画を示した最終レポートを７月４日に提出し、最終選考過程を経て予科生・予備生全員が GSS プログラムに合格したことはまことに喜ばしく、ここに報告致します。

ホームルーム「Get Together」の開催について

早川智洋　GSS本科生（L2）、吉川みな子　GSS特定准教授

GSS予科生・予備生にGSSプログラムの意義や活動内容を知ってもらうことを目的としたホームルーム「Get Together」を、2016年5月16日に京都大学東一条館において開催しました。予科生・予備生16名が、L2～L5の本科生23名および實馨プログラムコーディネーターを含む教員8名と年齢、国籍、所属機関を超えて交流しました。昨年度入学・編入したL2およびL4の履修者が自主性を発揮しこの企画を進め、リーダーシップスキルを磨きました。

GSS プログラムによるグローバル社会で活躍できるリーダーの育成について、国際色豊かな、あるいはリーダーシップ必須の活動体験に関する発表（表１）、予科生・予備生が本科生・教員と自由に話せる時間を通じて、16 名の履修に関する不安を幾分かは解消出来たのではないでしょうか。グローバルリーダーを目指して奮闘する新しい仲間が加わる日を心待ちにしています。

表１：プレゼンテーションの概要

活動体験	履修者氏名と学年
フィールド実習（シンガポール）	高橋詩野美（L2）
国際学術交流（エチオピア）	QU Huangqi（L2）
金沢市・能登半島における合同合宿型ホームルーム	Karlina（L4）
リーディングフォーラム	Bhekumusa Wellington LUKHELE（L4）
GSSスチューデントアソシエーション	大津山堅介（L3）
国際アドバイザー会議	中野元太（L3）

GSS 実習系科目報告会の開催

伊藤伸幸　GSS特定助教

GSS履修生による第13回と第14回の実習系科目報告会が、それぞれ2016年5月31日と7月19日に開催されました。報告会では発表者1名につき10分のプレゼンテーションと10分の質疑応答の時間が与えられ、それぞれの学生が自身の国内外における活動の成果と課題について報告し、評価を担当したカリキュラム委員会の教員や学生らと活発な議論を行いました。第13回報告会（表1）では、農学、医学、教育学、アジア・アフリカ地域研究、経済、工学、地球環境学堂、情報学の研究科から計23名、第14回報告会（表2）では情報学、工学、アジア・アフリカ地域研究、医学の研究科から計5名のGSS履修生が参加し、フィールド実習やインターンシップ、国際学術交流、産学連携プロジェクト、国際共同プロジェクトの活動について報告しました。異なる分野を専攻する学生が実習系報告会を通じてお互いの活動を知り、それぞれの研究の学際性をさらに高めていくことを期待します。

表1：第13回GSS実習系科目報告会

東一条館2階大講義室

名前	科目	題名
Mr. Haruka Ueda	FT	How Has France Promoted a Food Education Initiative?: A Case Study of Taste Education
Ms. Ongosi Anita Nyaboke	IN	Lifestyle diseases at a Biochemical level
Mr. Serge Mizerero	IA	Introduction to the use of GIS tools in Medical Research
Mr. Ryosuke Nakamura	FT	Field Training in Borneo Island, Malaysia
Ms. Chikara Okada	FT	Coexistence Organic Farming and Farming by Genetically-modified Varieties
Ms. Chikara Okada	IN	My Internship Gave Me a Wonderful Opportunity for My Research
Mr. Mitsuhiko Takada	FT	What I learned from Field training in California, USA
Mr. Mikiya Furumoto	FT	Introduction and spread of alien fishes in Thailand: An example of peacock bass native to South America

東一条館1階講義室（121・122）

名前	科目	題名
Mr. Bhekumusa Wellington Lukhele	IU	HIV Prevention Mobile Game Development for the Swazi population: A Japan-South Africa-Swaziland collaborative project
Ms. Mei Nakazawa	IA	GSS International School in Ethiopia
Ms. Mei Nakazawa	IC	Collaborative research on Water and Sanitation for Health with VHT in Uganda
Ms. Nami Fujimoto	IN	Assisting Youth to Explore in the Global Community
Mr. Ryo Ohyama	IN	Internship in Singapore, the Financial Center of Asia
Mr. Tomohiro Tanaka	IC	International Cooperation Project toward Sustainable Dam Planning in Myanmar
Mr. Hendy Setiawan	IN	Internship in TU Delft, the Netherlands: Report and Outcomes
Mr. Ryosuke Kajita	IC	Current Reality of Fire and Haze Management at Pelalawan, Riau, Indonesia
Ms. Naoko Kimura	FT	Restoration from the aftermath in Tohoku: People, environment, society, and culture

東一条館地下1階思修館ホール

名前	科目	題名
Mr. Genta Nakano	IA	Communicating beyond the disciplines
Ms. Ran Muratsu	FT	Medical Pluralistic Behaviors in Benin
Ms. Ran Muratsu	IA	Lessons from International Academic Exchange in Ethiopia
Mr. Qu Huangqi	IA	A presentation of the International School held in Ethiopia 2015
Ms. Sanae Ito	IN	A Report of Internship at Love Green Japan
Mr. Kensuke Otsuyama	IA	Lessons learnt from an International Conference at New Zealand and UK
Ms. Ei	FT	Land and forest resource utilization of swidden farmers in the Bago Mountains, Myanmar
Ms. Karlina	FT	Drought mitigation and water resources management in Lombok Island, West NusaTenggara Province, Indonesia
Mr. Ranit Chatterjee	FT	Resilience of SMEs in the post-disaster recovery of Nepal

注）科目名のFTはフィールド実習、INはインターンシップ、IAは国際学術交流、IUは産学連携プロジェクト、ICは国際共同プロジェクトの略です。

表2：第14回GSS実習系科目報告会

東一条館1階会議室（112・113）

名前	科目	題名
Mr. Takashi Sugiyama	IN	Internship with Prof. Naohisa Mori in Sapporo Gakuin University
Mr. Takashi Sugiyama	IU	Industry-University Collaborative Project with Hakusan Corporation
Mr. Ryota Gomi	IC	Antibiotic-Resistant Bacteria in Wastewater Effluents
Mr. Ryosuke Kajita	IC	The Current Reality of Fire and Haze Management at Pelalawan, Riau, an Indonesia-International Collaboration Project with the Security Department and the Local Community
Ms. Christina El-Saaidi	IN	Infection Control Education among Dental Care Professionals

注）科目名のINはインターンシップ、IUは産学連携プロジェクト、ICは国際共同プロジェクトの略です。

GSS 履修生の紹介

髙田 満彦
たかだ みつひこ

教育学研究科 (L2)

私は、少子高齢化などの要因から脆弱化する日本のコミュニティにおいて、特に1970年代に建設された新興住宅地の脆弱性に焦点を当て、地震・水害等大規模災害が起きたことを想定した研究を実施しています。この研究では、社会学的手法を用いて多次元的指標を設定し、コミュニティの脆弱性を様々な角度から測ろうとしています。また、脆弱化するコミュニティと連携しながら支え合う学校教育や行政の在り方を明らかにするため、防災教育やコミュニティに存在する社会関係資本の役割に注目して研究を進めています。研究フィールドは滋賀県ですが、コミュニティの課題をより明らかにするため、昨年度は東北地方や防災先進地域である米国カリフォルニア州等を訪れ、現地の専門家たちと研究に取り組んで来ました。GSSプログラムの最大の強みである学際性を生かし、理系のプログラム履修者からもヒントを得ながら研究を続けていきます。

杉本 康太
すぎもと こうた

経済学研究科 (L2)

現代には無数の社会問題があります。私が人生を賭けて取り組もうとする課題は、原発事故の再発防止です。母方の実家が福島県飯舘村にあったことで、2011年3月11日のあの事故は、私に大きな衝撃を与えました。故郷から人がいなくなり、線量計を携帯し、常に被曝量をチェックしなければならなかったのです。村人の多くは土地と生業（農業）を奪われました。将来いつ帰還できるかわからず、除染が完了して帰還しても、消費者は不安から福島の農産物を買わないだろうという予感から、もはや再び土地を耕すことは叶わないのではないかと失望していきました。若い世代は子供の健康リスクを考え、避難先に定住することを選びました。地域の共同体は崩壊しかけました。このため私は、太陽・風力・地熱などの再生可能エネルギーが、原発を代替できるようになるまで発電量を生み出し、運用できるようになるための電力政策を日々研究し続ける所存です。

立山 由紀子
たてやま ゆきこ

医学研究科 (L2)

生活習慣病による負荷の増大は、世界的に深刻な保健課題の一つです。これらの疾患は、先進国特有のものと思われがちですが、実際は、低中所得国で急速に拡大している疾患です。その要因として、経済成長、グローバル化、都市化による生活習慣の変化および高齢化が挙げられます。私は、途上国における生活習慣病の社会経済、文化的側面を含むリスク要因に注目して研究をしています。私の研究フィールドであるザンビア共和国も例外ではなく、生活習慣病への対策は、他の保健課題への対策の競合、感染症との併存などにより、状況は複雑になると考えられます。さまざまな要因が絡むこの課題に寄与できる研究を行うには、多角的な視点を持って取り組むことが必要です。学際性に重きを置いたＧＳＳプログラムを通して、人々の健康に貢献できるよう研究を深めていきたいと思います。

ミゼゼロ･ウヴンヴァ･セルゲ･アンドレ

医学研究科 (L2)

私は2009年にコンゴ共和国のキンシャサ大学で医師免許（MD）を得て、キンシャサ大学病院にて産婦人科の研修医として研鑽を積みました。その経験から新生児および母子保健衛生の道に進む決心をしました。4年間、低所得環境での臨床現場で医療に携わった経験から、救急体制としての医療行為の遅延や不十分な医療設備資源が原因で、母親と新生児の死亡例や母子に障害が残る症例が常態化している現状を見てきました。この問題を回避するためには、母子保健医療システムの改良を進める一方で、疾病の予防、健康増進および保健教育、そして死亡例を防ぐために規制問題への対処が重要であると考えるに至りました。私の研究目標は自宅から病院へ向かう救急体制のフレームワークを擁立することで、内戦終了後の医療体制として救急現場での周産期母子医療サービスを改善することです。これには学際的で独創的な論理的思考が要求され、その思考はGSSプログラムの中で育てられるでしょう。

黄 智暎
ファン チヨン

医学研究科 (L2)

私達の健康と行動の認識は、社会・文化・社会経済的階級により決定されています。私の専門分野である社会疫学は公衆衛生学の一分野です。従来、公衆衛生は行政主導による方策がとられてきました。しかし、社会疫学は市場原理のテクニックを用いることで、行動的変化を生む新しい方法を模索、提案しています。この市場原理を用いた方法は公衆衛生学のみならず他分野においても現実社会の諸問題の対処に有効とされています。

現在、私は日本における健康格差について研究しています。健康問題に関する慣習や知識、取り組みを調査するために、ハイリスクで結核に罹患するホームレスの人々にインタビューを行い、より高度な研究を目指してきました。研究の最終的な目標は、すべての国の一人一人がヘルスケアにアクセスできる社会の実現に貢献することです。GSS は学際的でグローバルな視点・視野を高めることを目的とした比類ないプログラムであり、私の研究目標に大いに資するものになると思われます。

中村 亮介
なかむら りょうすけ

農学研究科 (L2)

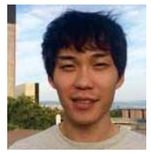
私は農学研究科の森林科学専攻に在籍しています。私の研究は、植物の多様性が極めて高い、マレーシアのキナバル山に生息する植物のケイ素蓄積に着目しています。ケイ素は地殻中でも二番目に多い元素で、自然生態系の持続性に密接に関与しています。

博士課程における目標は、熱帯林を持続的に利用する方法を見出すことです。私が言及する持続可能な森林利用とは、人々が木材資源などの森の恵みを活用しながらも自然生態系への影響を最小限に留める森林管理のあり方です。将来的に、私の研究は自然生態系への影響を和らげる部分に貢献すると考えます。

GSSは私に様々な研究科および研究機関出身のユニークで機知に富んだ学生達と交流する貴重な機会を与えてくれます。この機会は、私が未だかつて経験したことない学際性という形をもって私の知識の幅を広げてくれています。

早川 智洋
はやかわ ともひろ

工学研究科 (L2)



私は工学研究科に所属し、レスキューロボットの研究をしています。GSSに入る前は、一度も被災地に訪れたことはなく、被災地とはこのようなものだろうと想像のみを頼りにロボット開発をしていました。また、研究の性質上しかたのないことですが、工学研究科の研究はデスクワークのみになりがちで、海外をフィールドにしている研究科のように様々な国籍の人とのインタラクションはほとんどありません。

しかし私は、昨年の GSS のホームルームで被災地の能登半島を訪れ、被災した現地の方の声を実際に聞くことができました。また、GSS の様々な活動を通して多様な国籍の人と価値観を共有することもできるようになりました。

卒業後は外資系の企業に勤めてロボット開発をしたいと考えています。仕事に必要な海外の人との円滑なコミュニケーション能力も GSS の活動の中で得ることができると期待しています。

井上 瞳
いのうえ ひとみ

アジア・アフリカ地域研究研究科 (L2)

学位研究ではミャンマーの農村部において人々の正業の変化を追っています。いわゆる「農業国」のミャンマーですが、農村地域において農業が「主要産業」でなくなる日は目前に迫っているようです。より良い収入を求めて、農業を離れて、村を離れて就業する人が増えています。こうした変化はかつての日本の農村地域を連想させます。日本が抱える農村地域の過疎化や一次産業の衰退等の問題を避けるためにも、今こそミャンマーの発展のあり方を考える時期であると感じます。

私が研究で扱うのは生態学の分野ですが、実際の人々の暮らしは当然、政治や経済、環境変化等のあらゆる事象と密接に関連しています。GSS での活動を通して自分の専門性を超えた幅広い知見を習得し、フィールドで目にする現象により深い洞察を加えられるような地域研究者を目指します。

GSS 履修生の紹介

ノエミティナ・デュベルテュイ

アジア・アフリカ地域研究研究科（L2）

私は人里離れた山間部の環境開発に焦点を当て、現在はミャンマーのチン州でフィールド活動を行っています。チン州は土地が急傾斜地に立地していることから、主要な生計手段は、移動耕作です。しかし、地球規模の温暖化や急速な経済成長の影響を受け、山間部の村落では農産物の減少、人口・国家教育・市場アクセス・地元にはない価値観や生活スタイルの増大など、以前の生活に戻れない変化の最中にあります。この変化について、研究者がそれぞれの専門的観点からばらばらに研究を行っているのが散見されます。私の研究の目的はアクションリサーチを用いて、村の問題点と活性力について洞察的見識を提供し、政府および国際的プレーヤーによる開発支援の質を向上させることです。

GSS の学際性、および多彩な領域の研究者、学生、専門家から学べる機会は、地域開発の政策決定者を志す者として、調査目的のみならず、今後のキャリア形成において役立ち得るネットワーキングとリーダーシップ向上に不可欠と考えます。

松本 万里子（まつもと まりこ）

地球環境学舎（L2）

急速な経済発展と人口増加が進行する途上国において、廃棄物処理マネジメントは重要になりつつあります。特に都市部においては、不適切な廃棄物処理は洪水の被害や健康問題を悪化させる要因の一つとなるといわれています。

私は、フィリピンラグナ州カランバ市における公的な廃棄物処理施設の活用に向けた方策について研究しています。具体的には、廃棄物発生量の抑制とリサイクルの促進に向けて、公的な廃棄物処理施設を利用した学校拠点型廃棄物処理マネジメントの実態とその効果について研究しています。

廃棄物問題に代表されるような環境問題は、その性質から複雑で多分野にまたがって存在しています。私にとって GSS プログラムは、研究内容を様々な側面から捉えることを可能にする大変有益な機会です。5 年間の GSS プログラムを通じて、できるだけ多くのことを学び見聞を深め自身の研究にも活かしたいと考えています。

国際アドバイザー会議

中野元太　情報学研究科（L3）／GSA-EC 副代表

GSSプログラムの最も大きなイベントと言っても過言ではない国際アドバイザー会議（GIAC）に向けて、早くもGSS学生協議会（GSA-EC）が動き出しました。過去5回、GSSに関わる教員と学生との協働した取り組みで成功裏に行われてきましたが、一方で新たな議論の余地も見いだされます。それは「GSSの学生が研究者として或いは実践者として、将来どのようなアクションが起こせるのだろうか」という点であります。そこで第6回GIACは「行動志向の包括的アプローチ」を一つの柱に、研究者・実践者がいかに社会に貢献できるかを考える場となるべく準備を進めています。

そして GSA-EC は新たな試みも計画しています。学生と国際アドバイザーとの交流・対話の場を増やすためのワークショップを導入し、他大学リーディング大学院プログラムの GIAC への招待を予定しています。来年 1 月の本番へ向け、GSA-EC は活動を進めていきます。

GSS 学生協議会（GSA-EC）メンバー

4 月 11 日の産学協働イノベーション人材育成協議会の説明会（4 月ホームルーム）

勝山正則　GSS特定准教授

2016年4月11日に、GSS在籍学生に対する本年度オリエンテーションが行われました。例年通り、新年度のメンターの発表や履修の進め方についての説明が行われました。さらに本年度にはGSSの第1期生がL5となり、学位取得を控えているために、「グローバル生存学大学院連携プログラム修了審査(最終審査)」の実施要領について、詳細な説明が行われました。学生ごとにGSSカリキュラムの実施状況や博士論文の進捗状況も様々ですが、L5生のみならず、すべての履修生が将来展望をしっかりと持ち、無事に学位審査の日を迎えられることを願ってやみません。

これに引き続き、産学協働イノベーション人材育成協議会(http://www.c-engine.org/) によるインターンシップの説明会が開催されました。この協議会は、インターンシップの機会を通じてイノベーション人材の育成を図ることを目的に学生と企業との橋渡しをしています。GSS としては、カリキュラムであるインターンシップや産学連携プロジェクト、さらには将来の就職のきっかけを提供できることを目指して説明会を開催しました。履修生からは、参加企業や分野の拡充、インターンシッププログラムの英語対応などを求める声が上がりました。この説明会を受け、実際に企業のご担当者も参加したマッチングイベントが 2016 年 6 月 29 日に開催されることが決まりました。

インターンシップ説明会の様子

インターンシップマッチング交流会

西 真如　GSS特定准教授

6月29日、本学と産学協働イノベーション人材育成協議会との共催により、インターンシップマッチング交流会が開催されました。同協議会は、大学院生の中長期インターンシップをはじめとした産学連携活動の推進を目的に設立された一般社団法人で、京都大学をはじめ13の大学と、34の企業が参加しています（平成28年6月現在）。今回の交流会は、本部構内の国際科学イノベーション棟で開催され、GSS履修者29名を含む大学院生、企業関係者、教員など、100名を超える参加がありました。

交流会では、17 企業の担当者が「開発現場の紹介と院生への期待」と題したプレゼンテーションをおこない、各企業の開発研究の現場でどのような知識やスキルが必要とされているか、またインターンシップ生に取り組んで欲しい課題は何か、具体的に説明しました。続いて行われた参加学生のポスター発表会では 15 題のポスター発表がおこなわれ、そのうち 9 題が GSS 履修者によるものでした。ポスターの前では、それぞれの学生が取り組んでいる研究課題について、熱心に質問する企業関係者の姿が見られました（写真 1）。ポスター発表会に続いて、企業による個別ブース説明会がおこなわれました（写真 2）。いくつかのブースで企業の担当者と話した GSS 履修者の許冲さんは、「私は農学研究者として分子レベルの操作をおこなう知識とスキルを学んできたが、そのことに担当者が関心を持ってくれた。参加して良かった」と話してくれました。

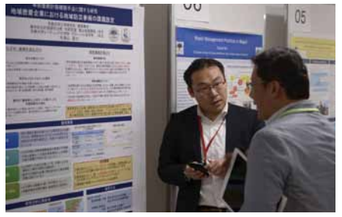


写真1：自らの研究課題について企業担当者に説明する大津山堅介さん（中央）

写真2：インターンシップの可能性について話し合うカリナさん（左）

学生主催のホームルームレポート

大津山堅介　工学研究科（L3）／GSA-EC代表

学生主催によるGSSホームルーム「学生による学生のためのカリキュラム相談」が7月6日に開催されました。今年度のGSS学生協議会（GSA-EC）は、卒業後にも活かせるネットワークを構築するため、GSS学生同士の交流促進を目標とし学生主催のホームルームを企画しました。

当日は 28 名の学生が集まり今後の計画立案に役立てるため、いくつかのカテゴリーを終了した先輩方から活動経緯を聞きました。

その後議題は GSS 全体のプログラムにおける意見交換に移り、GSS 活動の改善のための議論を行いました。今回出された議論は次回の学生主催ホームルームに活用する予定です。

学生主催ホームルームの風景

Grant Writing Seminar

西 真如　GSS特定准教授

研究職に限らず多くの職種で、補助金を獲得するための申請書を書くスキルが必要とされています。多くのGSS履修者にとって、最初にそのスキルを試されるのは、GSS研究活動経費を獲得するための申請書を執筆するときでしょう。筆者はこれまで多くの申請書に目を通してきましたが、「これでは研究の魅力が伝わらないのに」と歯がゆい思いをすることもありました。筆者は例年、GSS予科生を対象とした Grant Writing Seminar を開催しています。今年は7月11日に思修館ホールで開講し、予科生10名が参加しました。

「通る」申請書を書くためには、「目的」「仮説」「方法」「意義」「文章のスタイル」といった要素をどう提示するかが決め手となります。また申請者が専門領域についての高度な知識を詰め込んだつもりでも、審査員から見れば「見知らぬジャーゴンだらけでさっぱりわからない」申請書であったり、「誰（何）の役に立つのか理解できない」研究内容に見えてしまうこともあります。そして審査者は、一読して理解できない申請書をわかるまで読み返してくれるとは限りません。こうした「常識」をできるだけ早い時期にお伝えすることで、履修者には「通る」申請書を書ける人になって欲しいと願っています。

編集後記

９月１日防災の日、東京で開かれた会合で「協働知創造のレジリエンス：防災政策の隙間」と題してパネルディスカッションの時をもちました。そこであらためて実感したのは、レジリエントな社会を創るのは、「隙間」に気づくセンスをもち、表面的でなく根っこから「繋ぐ」意味を理解し自分でその方法を見出せる「人」。GSS というプログラムは、そうした人材を育てるための土壌とプロセスを生み出す仕組みでもあること、そしてその GSS で実際に今そうした人が育っていることを想いました。

この火が灯され続けられますように。

GSS ニュースレター（No.13）　編集担当　清水美香

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
Inter-Graduate School Program
for Sustainable Development and
Survivable Societies

News Letter No.13

平成28年9月30日発行

編集　京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
ニュースレター編集委員会

発行　京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
京都大学学際融合教育研究推進センター
グローバル生存学大学院連携ユニット
京都市左京区吉田中阿達町１
TEL　075-762-2197
URL　http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/